

寄稿

医療・福祉現場で働く

聞こえない人たちの

声

-2-

薬剤師の眞島昭彦まじまあきひこと申します。

私は、生まれつきの聴覚障害で、49歳までは左右とも70dBでしたが、現在は98dBです。調剤薬局で働いて35年になります。手話を始めてから28年が経ち、現在は手話でのコミュニケーションによる投薬ができるレベルになっています。薬剤師は国家資格であり、理数系が得意なものと視覚的な業務が可能という条件や親の勧めもあったので、資格の取得をめざしました。今回は薬剤師としての私の仕事内容などをご紹介します。

私が働いている調剤薬局は在宅

医療が中心で、外来も少しあります。会議と朝礼のときはスタッフが積極的にノートテイクをしてくれ、事務連絡は必ず紙に書いて伝えてくれています。私に話す時は

薬剤師という職業は

きこえない人向き

マスクを取ってゆっくり、はっきりした口調で話しかけてくれます。自作の医薬品説明書を配布し、周知した結果、何人かが手話に興味を持たれて、今では数字など簡単な表現ができる人もいま

す。やって欲しいこと、できないことを「具体的に」伝えるのが大切だと思います。

私の主な仕事は、在宅患者さんの「薬の一包化いっぽうか」で、複数の錠剤を一袋にまとめて入れる作業です。また、投薬は聞こえない患者さんの分のみを担当し、手話や筆談で対応するようにしています。主に視覚的に進められるような内容であり、聞こえない人に向いている仕事だと思います。

「きこえない人であっても、手話ができる」ということが大きなセールスポイントです。まずは、きこえない患者さんに近い立場で寄り添っていくことで、全ての患者さんの気持ちが理解できるようになっていくのだと思います。